

平成 24 年度第 2 回（通算第 46 回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

「他者」として生きること -日中間における移民研究の新たな課題-

教員世話人 安溪遊地 井竿富雄 進藤優子

院生世話人 張亮 吳曉良 中村彩佳

日時 平成 24 年 5 月 23 日（水曜日）16 時 10 分より

場所 国際文化学部棟 C-12 教室

主催 大学院国際文化学研究科

発表者 張玉玲 国際文化学研究科 講師

タイトル 「他者」として生きること -日中間における移民研究の新たな課題-

要旨

人々は、よりよい暮らしを求めて故郷を離れて異国に渡ります。ふるさとのある祖国、そして現在居住している移住国。移民たちの文化的、民族的アイデンティティは、世代を重ねるごとに、後者のほうに移行していくのが一般的とされています。しかし、自らの意思表示でもある「アイデンティティ」は、必ずしも「他者」である居住国の人々の認識と一致しているとは限りません。特に「集団」としての移民は、日本では常に「他者」として排除・差別されてきた経緯がありました。

このように、移民と居住国との相互作用のメカニズムを明確にするため、発表者はこれまで、神戸・横浜などの地域における華僑華人の文化活動を取り上げ、その具体的な事例を通して華僑華人のエスニック・アイデンティティの変容や、エスニック境界の能動的な定位のプロセスについて考察を重ねてきました。文化上すでに日本社会に同化したと思われていた華僑華人は現在、中華街の観光を舞台として、むしろ「他者」である日本人からのまなざしを利用して、中国の伝統を文化資本として売り出しています。「他者」としての「異」を強調することによって、経済的・社会的利益を獲得しようとするのです。

常に「中国」の代表とされてきた華僑華人は、日本の戦後の社会運動に加わった時期もありました。上記の文脈と異なりますが、これらについてもご紹介します。

最後に、現在研究中の、日本から中国に渡った移民、特に旧満州国の開拓民と異なる「自由移民」のケースを中間報告させていただきます。

上記と並行して、華僑華人研究の方法論や領域、最近の学界の動向などについてもご報告します。

キーワード：「他者」、アイデンティティ、自由移民、フィールドワーク、ライフヒストリー

参考文献

張 玉玲『華僑文化の創出とアイデンティティ —中華学校、獅子舞、関帝廟、歴史博物館』ユニテ、2008 年

張 玉玲「日中版画交流—李平凡在日期間中の活動を中心に」『中国 21』28、2007 年

張 玉玲「独日の植民地支配と近代都市青島の誕生」山口県立大学学術情報第 2 号、2009 年

※終了後 18 時から Yucca で、第二部として自由なトークを展開できる場（やまぐち国際文化学 SALON）を準備しております（有料）。こちらにも皆様の積極的なご参加をお願いいたします。